



## エアブラシ開発当時の回顧

# 『えあーぶらし今昔』

(1)

史談会開催日

昭和 42 年 (1967 年) 7 月 25 日

■ 語る人

永田 喜健 氏

(元永田写真製版所社長)

■ 【永田 喜健氏略歴】・

- ・ 明治 20 年 6 月新潟県高田市に生れる。明治 42 年東京高等工業学校工業図案科卒業 博文館印刷所入社、写真製版課主任を務める。大正 12 年永田写真製版所創業、昭和 20 年廃業。
- ・ 戦後二葉印刷会社に 5 年ほど勤められたが、数年前に白内障のため失明、第一線を退かれた。

私は新潟県高田市の生れでして、高田というのはご承知のように雪の非常に多いところで、小学校の時分の教科書には、雪で埋もれた町の上に立てるための「ここに高田あり」と書いた立札が役場から出た、というような事が書いてありました。それほど雪の多い所で、明治 45 年頃に 13 師団が出来て陸軍が訓練の中にスキーを取り入れることになり、それが機で雪の中で何もする事が無い若者たちの間にスキーが盛んになってきました。この頃は昔より雪の量も少なくなってきましたが、今年あたりはそれでも相当降ったようです。

私が高田の中学に入ったのが明治 35 年ですが、その時に「少年世界」という博文館発行の雑誌がありまして、その中に写真機械の広告が出ておりました。これを欲しいなあと思って、よく見ますと、2 円で説明書から機械全部を送ってくるので、早速申し込んだものです。その機械は進駐軍の兵隊がよく持って歩いていた「ボックスカメラ」ですね、ですから名刺判で、乾板が半ダース、印画紙が 1 ダースくらいありました。それで説明書を熱心に読んでどうやらこうやら写るということを覚えて、それで写真に非常な興味を持つようになりました。その時分そのような田舎の学生で写真機を持っているのは私一人でした。高田の市内にも写真屋が 2 軒か 3 軒あるぐらいなもので、写真機を持って遊ぶなんて人もいなくて、カメラを持って外を歩くのもきまりが悪かったです。いつも羽織の内に隠して持って歩いたものです。そんなことで時々、乾板を送ってもらいましたが、印画紙も太陽光線で焼付けする POP というものでした。今は POP というようなものを知っている人もいないでしょうし、あんなまどろっこしいことは出来そうもありません。

そんなことでカメラをいじっているうちに「永田君は写真がうまい」というようなことを言われるようになり、4、5 年頃になると学校に備え付けてある写真機は自由に使えるようになりましてね。学

校で運動会などの催しがあると、写真班だとか何とか言われて、その機械を弄んでいました。中学卒業の頃には写真を教える学校がないものかと真剣に探し始めて、たまたま東京高等工業学校に写真の部門があるということを知りました。それで試験を受け、運良くパスして、結城林蔵先生の教えを受けたわけです。

その頃には印刷のほうでも、印刷の図案つまり版下部門と写真や石版印刷の2部門がありました。図案のほうには1人しかいなく、写真のほうも3人しかいないという状態でした。3年後卒業して他の人は、今西君というのは大江印刷に入社し三色版印刷なんかを研究し、増渕君というのは朝鮮の印刷所に行きました。私は銀座に時事新報の印刷工場があり、そこに取敢えず入社したんですが、新聞の活字印刷ではどうも面白くないんで、もっと面白いところはないかなあと考えていました。

## (2)

1、2ヵ月経った頃、結城先生から話がありました。それは、君島潔という人がロンドン・マンチェスターの工業学校で3年勉強して帰ってきて、いろいろな機械など珍しいものを持って来たから、自分の助手に適当な人を探している、ということでした。それで結城先生は「永田君、どうだろう」ということで話してくれたんですが、私はすぐその日に飛びついて話を決めてしまいました。君島さんはやはり蔵前の工業学校応用化学を出られて、当時花王石鹼の工場に勤められていたんですが、どういう関係か知りませんが文部省の援助でマンチェスターの工業学校に留学したということです。君島さんのお孫さんは、いま朝日新聞の印刷局長から重役になっておられるし、その弟さんは共同製本に養子にいかれて社長をしておられます。

それで君島潔さんは、何か私のことを気に入ってくれ、いきなり博文館印刷所の写真科、当時は博文館写真製版所とっていましたが、そこの主任に推してくれたんです。そこではそれまで水谷景長さんが所長をしていたんですが、君島さんがイギリスから帰ってきて工場全体の技術面をみることになり、水谷さんが営業部長に昇進するということになったもんですから、私がいきなり主任になれたんです。

君島さんが持って帰られたお土産の中で一番大きかったのは、6

尺の輪転機でした。それはA全判で、片面が4色、裏面が2色という大きな機械だったんですが、そういう機械を持ってきても、日本にそれに当てはまる仕事がないんですね。それで博文館に頼んで「太陽」という雑誌をその機械に当てはまる大きさをやってもらうよう無理やり頼んだんですが、結局は1カ月に10日稼動すれば良いほうで役には立たなかったですね。

その他持ってこられた機械の中で、製版関係では「ペンロール」のものがありませんでした。このカメラを使え、と言われましたが、カメラはそんなに感心したものではありませんでした。ただレンズがトップのレンズだったのでピントガラスを見る時に非常に合わせやすかったです。その他、アーク灯が2台あったんですが、アーク灯は夜使うものだという事になっていて、昼間に雨が降って湿っぽい時でもアーク灯は使わなかったですね。アーク灯を使うには夜暗くなるのを待って使うなんて、今から考えてみればばかげた話もありました。それから凸版の腐食機ですが「ペンロール」で初めて作った1号機がありました。2尺5寸ぐらいの幅で、真白な陶器で作られたきれいな腐食機でした。版は上からクワで押さえ、下からはアルミの羽根で液を回転させ、直角に液が版面ぶつかるというような理屈を応用したものでした。

「コロジオン・エマルジョン」の赤版、藍版、黄版用と区分したのも数本きていましたが、使ってみてなるほどいいものだ、ということを感じましたが、それがなくなると英国へ注文しなければならず、到着まで1ヶ月や2ヶ月はかかってしまうということで、そんなに力を入れて研究はしませんでした。

英国で刷られたグラビアの見本もありました。「ベログラビア」という名前で、君島さんはこのベログラビアをよほどやりたくてしようがなかったんですが、当時の日本ではグラビアは研究している人はいても、それ程力はいれられてなく、興隆はしませんでした。そしてそのほか、これからお話ししようとするエアブラシの初歩のものがあつた訳です。



(3)

当時のエアブラシ機は、ポンプも自転車の発電装置にちょっと毛がはえたようなもので、タンクがくっついていましたが、君島さんはそのエアブラシもやりたいと思っていたようです。それで、

私が入る前のこと、伊藤という人が既にそこでエアブラシをやるということになっていたようですが、なにしろセルロイドで型を切つて、それでブラシをかけてホワイト調にして、それをまた繰り返すというのは、なかなか容易な事ではない、それで伊藤君は地紋なんかには非常に良いものを作っていました、カタログの製版に向くようなものは、そんなに一生懸命はやっていませんでした。どういうふうにしたらいいか、という事になって、早崎君に専門にやってもらおうということになり、本格的に研究するようになりました。どうせ完成までには、1年、2年かかるだろうからということで、早崎君にはその研究一筋にやってもらいました。約2年くらいかかったでしょうか、どうやら世間に出しても恥かしくないというものが出来るようになり、それを比較検討する意味で「印刷雑誌」に出してもらったことがあります。明治45年頃のことだったと思います。

そこまではそれで良かったんですが、私と同じ郷里の高田の人で大野という人がおりました。この人もやはり発明家でいろんなことをして、年とってから目を悪くし、私の様に失明しましたが、いま隆盛している窓のシャッターなどを発明した人です。私がエアブラシの話をして、防火用シャッターなどを写した八つ切りの写真をやってくれと言われ、それを早崎君に修整してもらって渡すととても喜んでくれました。将来にこの技術を是非発展させてくれと激励してくれましたが、ところが費用をいくら貰ったら良いか判らなかつたのです。当時そのような技術はどこにもなくて、標準があつたかないのです。それで私は出鱈目だと言って、自分でも少しボリ過ぎたかなと思いましたが、大野さんは喜んで30円払ってくれましたね。

それからは営業のほうでも注文をとるようになりましたが、横浜の相原製版所なんかからはよく仕事をもって来ましたね。やはり横浜には外人なんかもいて、エアブラシに関心が強かつたんでしょう。その相原製版から来た仕事が最初の仕事だったと思います。大正2年のことです。

大正3年の国際博覧会には出品して金牌を受け、その時の審査員が矢野先生でした。ああいう人はやはりそうした新しい技術などにすぐ深い理解を示すんだ、という事を感じました。その後だんだんエアブラシは盛んになってきましたが、「エアブラシという名前は前に印刷雑誌に発表するとき、議論を呼びました。「修整写真」といつて出すか、「写真修整」か「エアブラシ」かといったことで話が出たんですが、結局は「修正写真」ということで発表したと思います。その後世間に認められるようになり、エアブラシという



事でひとつの企業としても成り立つようになったんですが、大正6、7年頃だったと思いますが、光村印刷でエアブラシを取り入れたということで、内藤という男を世話して三村さんの工場でも使うようになってきました。

大正12年の大震災で博文館が全部つぶれ、36人亡くなったという様なことがあり、それが直接の契機となったわけではありませんが、私は博文館をやめて永田写真製版所というちっぽけな工場を作って独立した訳です。それが昭和7年です。

#### (4)

その後、東京にも写真製版業者が多くなり、組合を作ろうという話が、武藤という男から出ました。その組合の最初の会長になってくれという話が私の所にきました。ですが私は東京に製版所が何軒あるかも知らないし、組合運営なんてことも自信がないから他の人を選んでくれと断ったんです。そうしたら銀座で製版所をしていた辻村与三郎さんが会長になり、私は副会長というようなことになったわけです。

ところが、それから暫くしてから、エアブラシのほうにも組合が出来て、それはそれとして結構な事だったんですが、ある時、エアブラシの元祖は私だということを名乗り出た人がいたんです。これを聞いて私は非常に憤慨してしまいました。早崎君があれだけ苦心してやってきて、ようやくここまで来たのに、元祖を変な所に持っていかれたらたまらない、という気持ちになって、これをどうにかして反論してやろうということになりました。それには「印刷雑誌」に出した事を思い出して、印刷雑誌を何とか探し出そうということで方々歩いたんですが、どこを捜しても関東大震災のためになくなってしまって、1冊もないんです。それで大日本印刷の川田久長さんに頼んで、あそこの図書館室に合本してある雑誌を見せてもらって、それをもとにして反駁したようなこともありました。

その後、エアブラシの話をする機会があると私はこの元祖の話を必ず持ち出すんですが、それくらい当時は腹が立ったものです。今日ではエアブラシを日本全国で何千人の方がやっておられるか判りませんが、それがとにかく一つの企業として成り立っているから、元祖である早崎君の功労は大したものだと思います。

話はちょっと前後しますが、昔の博文館のことについて話しておきましょう。今の共同印刷の前の通りは昔は川が流れており、その



仙川は石神井川が流れてきて、大正大学の前で二つに分かれ、一本は大塚へ、一本は印刷局のある王子の方へ流れていたんですが、今の共同製本のところがちょうど対岸になっていました。明治42年頃にはそこにライオン歯磨の工場があり、そして、今の共同印刷の裏にかなり幅の広い道路がありました。歯磨工場からは白い粉がポッポポッと飛んできていました。それで共同印刷の抗議で本所の方へ引越したようなわけです。

それからもう一つは、共同印刷の従業員の通用門を真直ぐ行くと石垣になっていて、その上にはお墓が並んでいました。私が入った頃にはその石垣の下に写真科の工場があり、その隣が大橋幸吉さんの家になっていました。石垣から流れ出た清水が写真科の裏を通り、大橋さんの家のほうに流れていて池に注いでいました。ところがある時、製版のほうで流す薬が、その清水の中に溶け込み、池の鯉だか金魚だかがプカプカ浮かんできたことがありました。私は気が付かなかったんですが、君島さんが見回りしてきて謝ってきてくれたようなこともありました。

## (5)

大正8年、9年に石川島造船所がカタログにエアブラシを使用しましたが、それが博文館で最初に直接、利用したものでした。版のほうでは相原さんのほうが先にご利用されているけれども、大きい会社から利用されたのは石川島造船が日本最初という事になります。

それからまたこれは余談になりますが、先ほど話した君島さんが、明治42年に帰って来られた頃に、ちょうどヨーロッパでは、洋服のカラーの高い、いわゆるハイ・カラーが流行し始めていました。ですが君島さんのカラーは、あまりにも高すぎて変なものでした。多分、首が細いからそうなったのだと思いますが。あの頃から「ハイカラ」という言葉が流行り始めたんですね。君島さんがいつも言うには、常にジェントリーであれなどと言っていましたね。これぐらいで私の話を終わりにしたいと思いますが、先ほど「印刷雑誌」にエアブラシを紹介した、と申しましたが、これは「印刷世界」の思い違いのようでしたので訂正しておきたいと思います。明治45年に「印刷世界」にエアブラシが紹介され、公のものとなり、今日まで半世紀を歩んで来たことになります。



「世にブラシ屋という一群の人達がいる。この人達は世にも稀なる勤勉な人達である。『あすこがまずくて』『こちらがうまくて』なかなか値段は決められない、と超然たるものだ。一朝一夕ではモノにならない難しい技術を、永年かけて身に付けた苦勞もどこへやらのタタカレ放題の値段で仕事をしながら、人気取りの裏側で安値競争も辞さない構えで、ただ長時間働けば気がすむらしい、いまどき奇篤な集団である。そのうち通産省あたりから、人間国宝の指定の出るのを待っているのかも知れないが、これでは若い者はどうしてもついてこない。安くて良くて、便利が良ければ、お客さんはそのほうへ行くに決っている。資本主義の法則通りであるが、良くて安いも相対的なものだ。

生産の近代化なしに良質底値をやれば、経営がぶっぶれるのも資本主義の法則である。不自然な安値では質の低下は必然である。これでは客の方が迷惑をする。サービスのつもりが信用を落とすことになる。手仕事だから大量生産はととも、と言っているうちに豆腐屋の二の舞をやらんとは限らない。企業組合、協同組合へと、あんな仕事かと思うものまでまとまっていく。ウソだと思えば電話帳を開いてごろうじろである。その上、近代化促進法が血も涙も無く施行せねば、前向きに歩かない日本国の住民であるのに。

夏中、水を出さなくても水道料金はキッチンキッチンと取りにいらっしやる。その上いっぺんに6割も値上げをなさる。しかし、施設の近代化はなかなか出来ない様だ。それでも給料はがっちりもらっていらっしやる。これで立派なお役人様で通る国である。別にどちらが誰のマネをしたと言っているのではない。この国には“上の行方、下これを見習わねば不忠の民”という言葉がある。風呂屋さんも、パン屋さんも、すべて我々の日常お世話になっている商売の方々は、忠良の臣民ばかりであるのに、一人我々だけが不忠の臣になって良いのだろうか。

人間国宝に指定されたほどの立派な技術の持ち主が、貧困の中で死んでいった話を聞いた。ああ不忠の臣……」（全日本エアブラシ協会報第1巻第3号より）

